

# わが心の自叙伝

## 菅原洋一

.....▷2

加古川の生家は、今でいうスパーのような商売をしていたので家族はみんな忙しく、小さな私をかまっている余裕などなかった。そんなとき、ラジオで覚えた歌をみんなの前で歌うと「よういっちゃん、うまいね」と褒められることに気づいたが、当時は別段、歌手になんたいなどとは思いませんでした。その頃、私の子ども時代は戦争一色。男の子は兵隊さんになつて戦場に向くことが当然だったし、それこそが誉れだと教わっていたので、自分たちもそれ以外の考えなど持つはずもなかった。

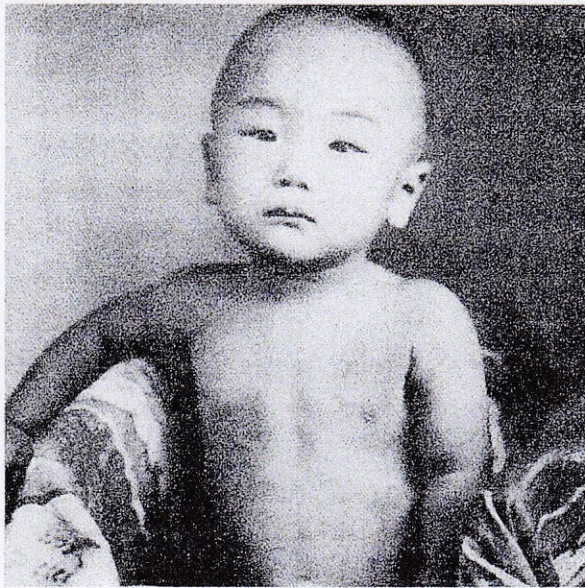
たまたま遊びに来ていたことが「海軍はカッコいい」と言っていたのを覚えていた。だから僕は「飛行兵か戦車兵になりたい」と心に決めていた。

世の中、ラジオから流れてくるのは勇壮な軍歌が多く、私も

### タンゴとの出会い

よく大声で歌った。童謡でも「へ肩を並べて兄さんと今日も学校へ行くのは 兵隊さんのおかげです…」なんていう歌があつて（「兵隊さんよありがとろ」）、早く大きくなつてお国のために働きたいと思つてた。たとえどんな時代であつても、音楽は心を育み、そこにはそれぞれの夢がまつているものだ。

しかしやがて敗戦。想像もしていなかった結果を目の前に突きつけられた。日本の男は全員、アメリカさんにちん〇〇を引っこ抜かれるといううわさがまことしやかに飛び交っていた。そんな中でも歌は人々を勇気づけていた。「リンゴの唄」や「港



幼少の頃の筆者

驚きとか悲しみとか、そんな言葉では片づけられない衝撃が体中を駆け回った。まるで夢遊病者のように屋根裏部屋からひとりで階下へ行った。誰もいなかったはずだが、ラジオから音楽が流れていたことは強烈に覚えていた。いや、まるで泣いているかのように感じた。

バンドネオンという小さなアコーディオンの音だったのだろ。うかやたら心に突き刺さつて、かき乱された。そしてリズムは、あのタンゴを刻んでいた。そのリズムが心臓のバクバクとした音と重なり合った。

頭の中は真っ白なのに耳だけはタンゴのリズムを異常なほど敏感にとらえていた。

私は後々、タンゴ歌手になるわけだが、タンゴとの出会いは、悲しみのどん底に突き落とされたときのことだったのだ。（すがわら・よういち「歌手」）

# 悲しみのどん底で心に刺さる